

◎それぞれの朝、それぞれの出発

集合時間までまだ 30 分以上あるというのに、駅改札口周辺には、小さなリュックを背負い、首に手ぬぐいをまいた小さな子供たちが、キャッキヤと楽しそうに集まり始めていた。スタッフは打合せのため、改札から離れた待ち合い席で、その様子を見守る。小さなグループが、少しずつまとまり、そのまとまりに、更にやってきた子どもたちのグループが合流し、10 分もたたないうちに、その塊はいつもの集合の大きさになっていった。どの子も表情明るく、友だちや見送りのママ達とにこやかに過ごしている。

(この様子なら、きっと大丈夫!!) いよいよ待ちに待った、年少 10 人、年中 3 人、年長 5 人と、平均 40 歳のおばさん達との楽しいアドベンチャーが始まる!

3 歳になったばかりの、年少々 M と S。お友だちや兄弟の見送りに駆けつけていた。M は、つい最近入園したばかりだが、毎日欠かさず倒木登りにチャレンジし、給食やお弁当も一人で最後まで食べられる、しっかり者のお姉さんだ。

すでに森の通常活動には堂々たる溶け込みようで、朝の登園でも全く泣くことがない。今回のお泊りのテーマソングも、誰よりも早く暗譜した。今日も、いつもの調子で、「行ってまいります♪」と、ママの手を自分から放して、みんなと改札を潜っていきそうにも見える。

S も、この間入園したばかりとは思えないほどの、森の一員としての存在感。実は数日前まで、当然のように自分も行く気満々だった。しかし、お兄ちゃんである kc の「僕だけのお泊り」という特別な気持ちを優先させようと、今回はお留守番となった。

苦手な食事の時間も、「もう少し頑張らないと、<来年の>お泊りに行けないかもねえ」と発破をかけると、姿勢をしゃんと整えて、箸を握り直し、モリモリたいらげていく。3 歳だというのに、やりたいことへの強い思いが、確実に S をがんばらせ、成長させている。「今日はお見送りありがとうね、来年、S も一緒に行こうね」とスタッフが声をかけると、笑って「うん!」とうなずいた。

年長の Y は、誰よりもこの日を心待ちにしていた一人。しかし、昨夜まで、高熱と腹痛に苦しんでいた。大好きな A とのお泊りも最後かもしれない。絶対に行く! 今朝は微熱まで下げ、執念の復活。そこまで言うならと、ママとスタッフは参加を許可した。顔が多少むくんでいて、病み上がりは否めない。「よく頑張ったね! 大丈夫?」と尋ねると、「大丈夫」との返事。少しずつ体調が戻っていくことを切に願う。

一方、年少の Ta は、当日の朝になって「今日はお泊り、行かない!」とママを困らせていた。想定内だったママは、自宅で健康シートに朝の体温を記入しながら、「そうだねえ…、じゃあ! 今から駅にお買い物に行こうよ♪」と、コロッと Ta の目先をかえて、ポンッと彼と荷物を車に乗せ、家をでた。

Ta は、お泊り→ショッピングとなり、ウキウキしながら駅へ。着いてみると、「あれれ??」…見慣れたお友だちが、いるではないか! 「わ~! ○○くん!

××ちゃん！」「偶然だね♪」「不思議だね♪」と、自然に友だちの輪に入っていく Ta。気が付くと、スタッフがでてきてご挨拶となり、あっという間に、なんだかいつもの嫌な感じ…。「ん？！これはお買い物でなく、お泊りの出発だ！」。スタッフの出現で我に返った Ta。一直線にママの傍らに立ち戻り、その手をぎゅっと握りしめ、口を一文字にし、固まってしまった。

A は、夏のお泊りで体調を崩したため、今年初めての宿泊だ。嬉しくてたまらず、スタッフに飛びついてきて離れない。「えへへ～、えへへ～」と、いつものかわいい笑いも止まらない。To もそれに便乗して、スタッフに飛びついて、「えへへ～えへへ～」と嬉しそう。さらに便乗組に、Yu、Mi が続く。精神面、健康面ともに、全く心配なさそうな 4 人(笑)。

スタッフには寄ってこないが、うれしそうにはしゃいでいるのは、年長の Kc と Kr と R だ。年長のこの時期らしく、大人が入らない子どもたちだけの意思疎通ややり取りを、仲間と心から楽しんでいる。小学生への階段を確実に上がっている証拠なのだが、毎年のことながら、このような姿をスタッフはうれしくもあり、やや寂しさも感じる。

少し心配していた Yt は、ママの近くにはいるものの、遠くから「おはよう！」と視線をあわせて声をかけると、にっこり。ちゃんと声をだして挨拶を返せた。OK！

A と同様、今年初めての宿泊になる Tk も、少し緊張気味にみえたが、仲良し Ra の天真爛漫さにテンションをひっぱりあげられ、「おはよう！」の第一声がきけた。よし！！（スタッフ、ガッツポーズ）。

その流れで、バギーに妹を乗せたママの横にぴったりとたたずむ Yh にも声をかける。先月入園したばかりで、まだ数日しか登園していない Yh にとっては、きっと心細さもあるだろうが、彼は未知への不安を期待やエネルギーにかえる力を持っている。少し不安そうな表情でスタッフを見上げていた Yh だが、そう見えて、誰にも負けないぐらい、お泊りへの意思は固い。まだ 4 歳だが、すばらしい期待のチャレンジャーだ。

すでに改札周辺は通勤ラッシュが過ぎ、観光客や買い物客の往来が増え始めていた。全員が、集合時間よりも 10 分以上早めに揃った。全員の表情を見回すが、子どもたちよりも離れがたそうなのは、むしろママたちの様にも見える。空気を察したスタッフが、全員の健康チェックや申し送りを手際よく済ませ、ママ達の波動で<泣き>や<不安>のスイッチが入らないうちにと、子どもたちをさっそく改札へいざなう。

「それでは、みなさん！いってまいります！」

短めに出発の挨拶を済ませたスタッフは、バディすら組ませずに、子どもたちを一気に改札へ。しかしながら、一人として振り向きもせず、元気に、キビキビと改札を通過していく。拍子抜けするほどに…。

しかし、この期に及んでも、Ta はママの手を離すことができていなかった。親子は、互いに言葉もなく、見つめるでもなく…。この先、ママは？！Ta は！？

周囲もかたずを呑んで二人を見守る。その時が来るのか、今日はあきらめるのか…それぞれの複雑な気持ちが、汗ばむ手を通じて、二人の間にだけ行き来する。

とその瞬間、ママはまるでボーリング玉でも投げるように、その手を Ta ごと後ろから前へ振り出し、子どもたちの後方へ向かって、一思いにわが子を投げ出した。Ta はその勢いによって、列の最後尾に紛れることとなり、投げ出された惰性の力を借りて、トボトボと歩き出す。7m 先の改札をぬける時に声をかけると、Ta は、目を真っ赤にウルウルさせスタッフを見上げるが、一言も発しない。それでも決して、歩みを止めず、戻ることも振り返りもせず、友だちの後について構内へ消えていった。Ta 親子が生まれて初めて経験する、ママなし×息子不在の一泊二日のビッグチャレンジ…。それは、Ta の強い気持ちと、ママの覚悟で幕を開けた。

◎ 車窓から

出発までは 30 分ある。〈泣き〉どころか、やや興奮気味の子どもたちに、深呼吸させ、一端落ち着かせる必要すらあった。改札を通り過ぎれば、全員前しか見えてない。ママを恋しがるとは一人もなく、いつものように、スタッフの指示に注目している。心配した〈泣き〉のスイッチは、結局のところ、ママたちのそれ以外、お泊り中一度も入ることはなかった。

駅構内は、タイミングよく列車の往来が途絶え、人気も少なく閑散としていた。足元に注意しながら、一步一步ホームへの階段を下りる。みんなで列車に乗るのは、森開園以来、初めてのことだ。年中の It は、ウキウキがどうにも止まらず鼻歌が出る。さっきまで不安そうな顔だった Ta もすでにママを忘れ、同級生の Kz と「これから、新幹線に乗るんだよね〜♪」と楽しそうに会話している（実際はフツの JR なのに（苦笑））。ホームでは、列車に乗るときのマナーやバディについての話を聞き、しばらく発車を待つこととなる。

今回の移動では、各バディが 3 グループに分かれる。A グループは、Kr☆Ir、Tk☆Ra、To☆Mi の 3 組。B グループは、Y☆Yt、It☆Yk、Kc☆Yu の 3 組。C グループは、R☆Kz、A☆Ta、Na☆Yh の 3 組。“列車の乗り降りは、足元の隙間に気をつけて” “他のお客さまもいるから、静かにしよう” など。

「そうそう。ヒミツのアメもあるからね」とスタッフ。お腹が空いた時はもちろん、もう少し頑張ろう！という時の、元気が出てくる魔法のお菓子だ。「空から降る雨が、アメだったらいいのにな」と、R。「ステキ！でも、当たったら痛いかな？」とスタッフ。「だったら、カサをさせば？！」と、A。「こぼれて落ちたら、もったいないじゃん！」と、Ta。「じゃあ、バケツ持ってくる！？」と再び R。「いいね、いいね〜♪」と、みんな。そんな仲間のやりとりを、ニコニコ聞いている、新幹線の登場待ちモードの、Kz と Na（笑）。〈ヒミツのアメ〉で、ここまでイメージが膨らみ盛り上がる子どもたち。ワクワク気持ちが膨

らんでいるのが伝わってくる。

出発 10 分前、乗車予定の列車が、ようやくホームに滑り込んできた。降車客が下りた後、グループごとに、それぞれの扉から乗り込む。始発なので、全員がボックス席に座ることができた。座席 5~6 列分で 1 枚の大きな窓。外の景色がよく見える。車窓から望む空は、雲一つない快晴。秋の日差しが、キラキラとまぶしい。

「どっちに進むと思う？」というスタッフの問いに、前方、後方それぞれ半々に指さす。遠くに車掌の姿を見つけた Kr と Tk は、そちらの方を迷わず指し示した。「だって、車掌さんがいるもん」…さすがだ！

To は乗った途端、「列車が動かない！」とイライラ。「あと何分で出発するの？」と聞いてきた。「10 分くらい。」そもそも、10 分という長さがわかるかどうか。しばらくすると「あと何分？」と再び聞いてきたので、「あれから何分くらいだったと思う？」と聞き返すと、「3 分くらい」と答えた。「あと 6 分。今経った長さの、倍くらいだよ」と、伝えると、「そっか」と、その長さがわかったようだ。出発を待ちながら、列車にまつわる話をしたい To。家族のことを話す Mi とスタッフの間に、「僕はね！僕はね！」と割って入ろうとする。スタッフが、「To、ちょっと待って。Mi の話が終わってからね」と諭すと、「うん」と、うなずいた。自分の話の番が来る頃には、待ちに待った出発。「やった～！！」電車のドアが閉まると同時に、話そうとしていた話題は、中央駅に置いてきぼりになった。

「わたし、列車初めて！」と、うれしそうな A。「私も！」と Na。列車のスピードが速く、景色が後ろに飛ばされていくような感じをみた Ta は「めっちゃ速いね！」「見えない！見えない！！」と興奮気味。Y も外の景色を見たい気持ちいっぱい、お尻があがらないように、座席から立たないように気を付けながら背伸びする。しばらくするとトンネルに入った。「わ～！」「真っ暗だ～！」の大合唱。

40 分ほどの乗車のため、スタッフは子ども達のリュックを網棚にのせようとリュックを集めにかかった。すると、それまでご機嫌だった Kc は表情をかえ、「嫌だ！」と拒んだ。スタッフの顔ぶれをみて不安を感じたのか、このまま網棚に忘れられては困るとでも考えたようで、「荷物は自分で管理する」と言う。Kc の心配は最も、と Y も It も Yk も、Yt まで！賛同し、全員が網棚には載せない、ボイコットが始まった。スタッフは苦笑、必死になって「もし忘れたら、ちゃんと駅員さんに話して取り戻すから、安心して」と説得。やや不信感を抱いたままだが、なんとかスタッフに荷物を預けてくれた。Kc は駅を過ぎるたび「次は何という駅なの？」と、常にスタッフの乗り過ごしを気にかけてられている。友だちと楽しみながらも、頭のどこかで、「電車にのって、バスに乗り換えて、やまねこバンガローへ…」見通しを持って移動している。年長らしい、しっかりした姿が伺えた。

Yu は、お泊りが楽しすぎて、トンネルに入っても、出ても、すべてが「わ～！！

すごい」「わー！すごい」。何を発するにも、つい大きな声になっている(笑)。しかし、話をちゃんと聞くことができ、乗降時には順番を守ってスムーズに行動できていて、スタッフを安心させた。時折、駅構内や電車の中で、ほほえましく見守る周囲の大人たちに、「僕たち、森のようちえんです！」「こんにちは！森のようちえんです」と、元気に自己紹介してまわってくれる。その声と表情は、いつも歯切れよく、明るく、微笑ましい。Yuにとって、森のようちえんは誇りであり、プライドなのかもしれない。そんなYuの姿こそ、私たち森の誇りであり、愛くるしくて仕方がない。

Ytは、特に大きなアクションをするわけではないのだが、いつもよりも口数が多く、いつもよりも大きい声で、楽しそうに同学年のYkやYuと話をしていた。入園して間もないころのYtは、いつも目をうるませ、なかなか友だちの輪に入っていけなかった。声をかけに行こう！と誘っただけで、涙がこぼれることもあった。ボックス席に友だちと座り、車窓を眺めながらキャッキヤとはしゃいでいる姿や、ボイコットを楽しむ今日のYtをみて、すっかり森の子になったなあ、嬉しくなった。

Ykは、いつもにも増して天真爛漫で、外の景色がどんどん変わるのが楽しい様子。一つ一つが新鮮なようで、「わ～っ、すご～い！」「わ～っ、◎◎があるう！」と言いながら、Itと窓にぺたりとくっつき、驚いたり、素直に感動している。すでに公共のマナーをしっかりと理解し、スタッフの話もちゃんと理解して協力してくれていて、お友だちが興奮しすぎて大きな声を出したときなどは、優しく制すなど、年少とは思えない落ち着きで、この先も安心して移動できそうだ。

◎ バスの行先は…

市街地をぬけ、トンネルをくぐり、畑がひろがり、左右の景色が山間になると、いよいよ降車駅の〈木場茶屋駅〉に到着。町の中心部に住んでいる子どもたちにとっては、見慣れない無人駅だ。ホームには誰ひとりなく、駅員もいない。降り立った子どもたちの「ばんざ～い！」「やった～！」の歓喜も、がらんと響く。

せっかくなので、一人一枚切符を持たせ、改札を通り抜けることにした。スタッフが、切符を改札ボックスに入れて通過する旨伝えたが、YhとNaは、周辺の野山の景色が気になって、切符を握りしめたまま通過してしまった。そこへ、追いついた年長のKrが、「ねえねえ、Naちゃんたち。切符はあそこの箱に入れてから出てくるんだよお」と、改札を指さしながら、やさしく教える。ふっと二人は我に返り、改札ボックスへ投函しに戻った。Krはまた、Ytが靴をはき違えて降り立ったことに気づき、「僕が手伝ってあげるよ。」と、やさしい口調で手を貸した。〈小さいお友だちや困っているお友だちのお手伝い、してあげなきゃ〉という優しさが、この所のKrからは常に溢れている。そしてそうい

う優しさが、次から次へと別の仲間を介して広がり、小さな不安や寂しさを、ここかしこで穏やかに包み込み、和らげていく。こういう場面に立ち会うと、大人の私たちまでが、本当に心癒され、救われてしまう。子どもの優しさに、大人はたくさんのものを教えられる。

駅のロータリーには、今回お世話になる精舎の森からお迎えのバスが来ていた。初めて乗る、いわゆる幼稚園バスに、みな興奮している。駅前で記念撮影後、お迎えに来て下さった現地スタッフにしっかり挨拶をし、ギュウギュウになりながらバスに乗り込んだ。もちろん、あの歌を歌いながら…。

バ、バ、バスの いきさきは～ やまねこバンガロー
むかごの 森を めけて どこまでも～
ホッホー バンジョー ならせば たのしい パーティ
みんなで やこうよ バーベキュー ジュ♪ジュ♪ジュ
ほしが きれいさ～

いつも恥ずかしそうにうたう Tk が、みんなとニコニコしながら、誰よりも大きい声で！といわんばかりに、張り合って元気に歌っている。そんな姿が、とても嬉しかった。

国道を外れると、まさに<むかごの森>が、路地の左右に現れる。バスに乗車して5分。森の入口に到着し、ここからは、むかごの森をぬけて、やまねこバンガローを目指し、みんなで歩いていく。木々がおおいかぶさった道は、まるで天井の高い、緑のトンネルのよう。途中、サルナシの実をみつけた。大人の親指の先ほどの丸くて茶色い実は、切り口がキウイに酷似していて、食べるととても甘い。後でみんなで食べてみよう、と A と Yk は大切にポケットへしまう。吉野の森にはない実や植物を、迎えてくれたおばあちやま先生に教えてもらい、子どもたちは未知のフィールドに、興味深々だ。「あっ！冬イチゴだ！」「吉野よりもいっぱいある～！」午後からの森の散策も、期待が高まる。

10分ほどだろうか。小枝や枯れ葉をパキパキ踏みながら歩くと、茶色の大きな建物と芝生広場が目の前に開けた。11時40分、<やまねこバンガロー>に無事、到着した。

◎ やまねこバンガロー

まずは荷物をおろし、お茶を飲んで一服したら、さっそく室内オリエンテーション。御仏様が祭ってある大広間は、ご飯を食べたり寝たりする部屋。広いテラスがついていて、そこではバーベキューもできる。広間には広いシステムキッチンが続き、カウンターもある。広間をでて廊下を進むとトイレ。清潔で、手すり付き。車いすでもは入れるように、床に段差がないから、みんなも楽ちん。その奥には、全員で入れそうなほどの脱衣所と大きな洗面台。広々とした浴室には、真っ白なバスタブがおいてあり、湯気の雲を突き進む箱舟のよう。湯船に入りながらのモミジの庭の眺めが最高だ。今夜はみんなで湯船につかって温まる。やさしくきれいに、大切に使おうと確認した。

おじいちゃま住職様からは、御仏様についてお話を伺った。It は、初めて見る大きな御仏様が気になって、「あれは何?」「これは何?」と質問。いつも、みんなを見守ってくれていること、ご挨拶するときは手を叩かないで、そっと両手をあわせ目をつむること、など教えていただき、全員で「今日からお世話になります」とご挨拶した。

◎ ランチタイム

12 時過ぎ。お楽しみのランチ。バンガローのテラスは秋らしくない、まばゆい日差し。5 分と座ってられないので、大広間で、涼しくランチボックスをひらくことにした。現地に早入りしたスタッフが、炊きたてご飯を準備。ご当地の魚すり身で作ったさつま揚げ、野菜いっぱいマカロニサラダも、すべてスタッフのお手製で用意。炊きたての新米は、本当においしい。今日は、いつもの給食以上に大盛況で、Ta や Na、Yt、Yu といった、常連メンバーに加え、沢山の子どもたちがおかわりをし、それもいつもより断然早いペースで掻き込んだ。

食間の薬の服用があった Mi。苦い苦い粉薬を、ママに言われた通り、ぬるま湯に溶いて、みんなの前でぐぐぐっと一気に飲み干す。すごい！本人は涼し気な顔で自分の席に着いた。Mi のちょっと得意げな横顔。いいね！

Ra はいち早く食べ終え、マカロニサラダを 4 回もおかわり。その度に「みて～！みて～！みて～！」と、舌をペロッと出しながら、片方の肩を上げて、ウインク。弁当箱を見せつつスタッフ全員に報告してまわる。いつもはゆっくりな Ir も、相当さつま揚げが美味しかったようで、2 度おかわりに席を立った。もらうと、ニカリ！と笑みを浮かべ「今日は、これ（さつまあげ）が一番美味しい♪！！」と、大きな声でスタッフの労を労ってくれた。

早く森に入りたい R だが、やはり空腹にはかなわない。いつもとは違ってテンポよく食べると、その後おかわり。それもさっさとたいらげる。体中からワクワクがあふれ出ている。

…1 年前の夏のお泊りの時、目を潤ませながら「おかあちゃんと離れるの、さびしい」と訴えた R。お泊りは楽しみだし、頑張りたい。でも、やっぱり不安で、寂しい。「今日から明日のお迎えまで、スタッフが R のおかあちゃん。お友だちが家族。何かあった時、おかあちゃんやおねえちゃんだったら、何してくれる？」(R)「助けてくれる。」(スタッフ)「そうだね、今日もみんながいて、助けてくれるから大丈夫。」と諭すと、自分にうん、うん、と言い聞かせるようにうなずいていた…。目を見張る成長。子どもはみるみる、大きくなっていく。

今朝まで体調の芳しくなかった Y は、移動しながら徐々にテンションをあげてきて、ランチ時にはすっかりいつもの Y に。病み上がりを心配するママやスタッフの助言無視で、おかわりが止まらない。もっと食べたい、まだまだ食べられる！というのだが、おなかはぽっこり(笑)。元気になってきた証拠だろう。本当に連れてきてよかった。何しろ、2 杯で諦めさせるのが大変だった。

デザートのみかんを先に食べたい It も、今日は聞き分けがよい。おかずだけ先に食べ、白米だけで食べにくい、と言い訳しながらも、ちゃんと食べないと遊べない、と伝えて様子を見てみると、いつのまにか全部しっかり食べ終えていた。

最後の kz は、順当にいつも通り(笑)。いつもより、楽しいことがおおいから、どうしたっておしゃべりが増える。仕方がない(笑)。新幹線ではなかったけれど、大好きな列車に乗れて、上機嫌な Kz。今日はみんなも寛大に微笑ましく、Kz が食べ終わるのを待って、全員で荷ほどきを始めた。

◎ いざ！精舎の森へ

あまりに懐の広く深い、精舎の森。串木野幼稚園様のご厚意で、今回、特別に全面開放いただき、子どもたちは、まさしく自由に、制限なく、思う存分、自分たちの遊びの世界を満喫した。その充実度×満足度は、<おやつ時間ももったいない！><太陽さん、まだまだ沈まないで！>の、連続 4 時間の活動時間が物語っている。

太い大木が、行く先々で「やい、森っ子、わしゃ、高くて長いぞ〜！」と目の前に立ちはだかる。太いツタも、高い木の枝から何重にも垂れ下がり、「やい、森っ子、この揺れに耐えられるかのう？」と、ゆっさゆっさ動く。見たことない花、初めて発見した虫…進んでも進んでも、次から次へと、大木やツタや崖、様々な生きものたちが、怖いくらいに、子どもたちの心をわしづかみにして離さない。まるで、吉野の子どもたちの、力だめしをされているような、挑戦状を突き付けられているような、そんな気すらしてきた。さあ、森っ子たち！いざ、本領発揮と行こう！

「芝生広場の隅では、ミツバチを飼っていらっしゃるんだって。もしかしたらミツバチが“zu-zu-zu…”ってることがあるかもしれない」とのスタッフの話に、さっそく反応し頭を抱えて地面に突っ伏す子どもたち。“ハチ対応”はバッ

チリ！

いよいよ芝生広場をぬけ、やまねこバンガローから、5分ほどで精舎の森へ。Rがいち早く登ったのは、沢山ある倒木の中でも急傾斜な太い木。5m登り進めば、高さは軽く3mを超えていく。木登りが得意なRも、こんなに自分にとって心地よい木は初めてなのだろうか。登ったり降りたりを繰り返しながら、その木から1時間離れなかった。

彼が自力で登れる一番高い地点には、ちょうどよい枝の折れた跡があり、そこにロープをひっかけて、登ってきた子が消防士のようにすすすーっと降りれるよう結んだ。ツタのこんがらがった中を下りる、スリリングなルートで、その後限られたメンバーが上っては降りるという、高度な木登りコースが一本、完成した。このロープは、2日間、Rが管理し撤収まで担当することとなる。

年少のMiは、果敢にもRを追うように、同じ木にしがみついで登り始めた。吉野の森でずっと練習してきた木登りの成果が、ここに出た。高さにさほど恐怖心がないMiにとって、長く太くどの木よりも空に近づけるこの木は、2日間を通じて最高にお気に入りの私の木となった。ロープを使って3mをすべり降りてくるのもお手の物だ。体が小さい分、こんがらがったツタの間をぬけるのは、Rより手際が良い。

KcとKrは、よほど相性のいい理想の木をみつけたとみえて、ずーっとその木の先まで登り、二人でこそこそ話して過ごしていた。鳥が鳴き、遠くにみんなの声が聞こえる、まるで秘密基地のような木の上の世界。何の話をしているんだろう…しばらくそっとしておいた。

1m以上の高さのツタを全身をつかって綱渡りしながら、樹間を動き回るA。身軽なAは、その遊びが楽しくて仕方ない。軽やかに木から木へ飛び移るAをみて、真似したいMi。もっとゆるやかなツタで、Ykとのんびりブランコ遊びを満喫していたのだが、Aに刺激を受けたのだろう。Aと同じところをやってみたい、とやってきた。

Miは、Aに比べれば手も足も短いだけに、そう簡単にはいかない。それにAが軽くやってのける高さにいざ登ってみると、想像していた以上の高さで、それだけで足がすくんでしまうMi。それでも、バランス感覚のすぐれているMiは、果敢にスタッフに力を借りながらAのルートを追いかける。難しいところは、Aが丁寧にアドバイスしてくれる。下から見上げるスタッフと、上から見ているAの目線では、明らかにAのほうが適格なルートと方法を後輩たちに伝授することができる。結果、Miは時間をかけながらもやり遂げた。

Raももちろん負けてはいない。遠くでみていたRaも「やってみたい！」とMiに続く。根性は森っ子トップクラスだ。Miの時と同じように、Aが丁寧に見本をみせながら、アドバイスしていく。笑みをもらすこともなければ、泣き言も言わない。これでもかというぐらい真剣な面持ちで、必死にツタに全身でしがみついている。あと一步の最後の渡りで、腕の力が持たず、ずりり、と落下したRa。背中とお尻を樹皮にこすりながら50cm滑り落ちたのだが、落ちると

すっと速足で森の奥のほうへ行ってしまった。

その後、ぐるっと一周、周囲を無言で歩きまわり、また戻ってくるかと思っただが、そのまま方向を変えて別のところへ去って行ってしまった。大したケガではなかったのだが、多少は痛かったらうし、何より悔しかったのらう。かみしめるように自分の気持ちをぐっと内へ納めた Ra。涙をみせることはなかった。

しばらく間をおいてスタッフが近づき、Ra に声をかける。「さっき、痛くなかった？痛いときは、＜痛い＞っていいのよ。Ra の＜痛い＞は全然かっこ悪くない。本当に痛いときは、ママだと思って言っているのよ」と伝えると、しばらくして「うん」と、少しほっとしたように、少し照れくさそうに頷いた。

低く横たわる木には、スタッフがロープを使って、一人用のブランコを設営した。ブランコ大好きな Ir が、基本的には独占状態だ。Kz と Na もやりたがったので、長いロープを使って、3 人分並べて作ってみた。3 人はご機嫌で、自分のブランコにニコニコしながら座っていた。

途中、It もブランコをやってみたいとやってきた。並び方やルールの考え方の違いで、Ir と小さなトラブルとなり、結果、It はいじめてしまう。彼の主張する並び方も一理あることはあって、その辺がまた更に It の気持ちの切り替えや諦めを妨げてしまう。しかしそのうち、ひょっこり笑顔になり、スタッフの横顔をのぞき込んできた。自分の気持ちを随分コントロールできるようになってきている。この二日間も大いに楽しみだ。

戦いごっこをしたがっていた、Kz と Yu。Yu は「よし、誰かやっつけるやつを探そう！」と、Kz と相手さがしに懸命だ。でも、今日はいつも相手をしてくれるお兄ちゃんたちは、みんな木の上や崖の上だ。こういう時こそ、大好きな Yk や Ih と一緒に遊びたい♡。

そこで Yu は、Kz と作戦をたて、Na が加わり 3 人で遊んでいる女の子たちに、ちょっかいを出し始める。しかしそこは女子組。「そんなのしない、つまらないもん」と全く 2 人を相手にしない。すでに Yu と Kz の中では、戦いごっこはどうしてもよくて、3 人の女の子たちと遊べればそれでいいのだが、どうも彼女たちが食いついてきそうな遊びが思いつかず、結局、「戦いごっこ、最高だぜ！俺たち、強いぜ！」といった安っぽいセールスになってしまっている。

あまりのしつこさに、いよいよ女子 3 人が切れた。Yk に至っては、嫌だからやめて！と泣き始める始末。スタッフは、Yk に「何がどういやなのか、ちゃんと説明してみたら？」とアドバイス。しゃくりあげながら、「棒とかでバンバンという戦いごっこは、危ないし怖いから、嫌なの」と、筋の通った説明をした。Yu はその思いを聞いて、「わかった」といった。

すると Yk が、「私たちと遊びたいのなら、危ないこととか怖いことはしないよ」と、付け加えた。あんなに勇ましかった Yu は、「うん、うん」ととても優しい声で返事した。そして、「怖いことしなければ、Yk たちは僕たちと遊んでくれるんだよね？」と聞き返すと、「そうだよ。もう戦いごっこはしないのよ」

と、今度は Na が返した。Yu は後ろを振り返り「Kz、わかった？怖いのにしちゃだめなんだよ」と、Kz に伝言した。それを聞いた Kz は「うん、わかった」と更に優しく返事をした。

Na が「あっちで遊ぼう」と切り出し、女の子たちが移動し始めると、その後ろにぴたっとついていく Yu と Kz。二人に気が付いた Yk は、再び、「それからね、<オレ>とか言わないで、<ボク>って言ってね」と更に付け加えた。

Yu は後ろを歩いてくる Kz に、「Kz、<オレ>とかっていつちやだめなんだよ、<ぼく>って言おうね」「うん、わかった」と、これまた優しくやり取りした。

子どもたち同志で育ち合うって、なんて素敵なんだろう。互いに影響をうけ、素敵な子になっていく子ども達。スタッフは一部始終をじっと耳を澄まして聞き入り、あまりにもかわいく一生懸命な年少 5 人の会話に微笑んでしまった。

To は、新しいフィールドでも植物や虫に興味がわく。活動中みつけたムサシアブミ。よく知らない年少組に丁寧に解説し、手でさわらないほうがいいよと、アドバイス。偶然みつけた、ゴム製おもちゃのような、真っ青な虫。これについても、あれやこれやと自分の頭の中の知識をフル回転させ、きっとヤスデの仲間であろうという、スタッフと同じ答えにたどり着いた。

木登りの休憩に入っていた年長 5 人に、スタッフが崖のぼり競争をしよう！と声をかける。すると、「僕もしたい！」と Yt が自から名乗り出た。それを見ていた Tk も、「僕も！」と参戦。7 人で競争することになった。メンバーを替えながら、何度か競争することになるのだが、転んでもおちても、どろだらけになっても、決して今はお兄ちゃんたちに勝てなくても、「楽しいねえ！」と、Yt が瞳をキラキラさせながら、話してくれた。

Yh は、活動を始めてまだ数日。森での遊び方のコツや醍醐味を完全にはつかんではいない。他の子どもたちにとっては、とても魅力的な大きな木や長いツタも、どんな風を楽しめばよいのか模索しているところだ。いつも戦いごっこをしてくれる年長の男の子たちも、今日は木登りに夢中で、何度誘っても相手にしてくれない。そんな折、なかなか思い通りに遊べないストレスが最高潮に達したのか、R が持っていた大きな枝付きの長い竹が欲しかったのに、と大泣きを始めた。スタッフと話しているうち、いよいよ悔しさが抑えきれなくなり、とうとう大爆発。「少し一人で考えてみて」と遠くから見守っていると、入れ替わりに、Ir と Yk が近づいていった。

Ir は、普段、一人遊びをすることが多いが、今日は同世代とのかかわりが楽しいようだ。何人かの女の子たちと、一緒になって広い森を歩き回り、ごっこ遊びやブランコを楽しんでいる。そんな状況が彼女の心を軽くしたのか、「いつまでも泣いていたら、遊べないし楽しくないよー」と、泣いている Yh に気さくに声を掛けた（その通り！と背中越しにスタッフうなずく）。

様子をみていて気になっていた Yk は、「私が竹さがしてきてあげるよー」と散策に。しばらくして「ほら、いい竹もってきたよ♪これどうぞ」と渡す優しさ（ん～！なんと素晴らしい！）。

ところが、そういう周囲の同情が気に入らない Yh は、更に大泣き。その様子に、女の子 2 人もあきれ顔。こうなると、泣いているほうは引くに引けない。

何かよいきっかけがないものか、と、スタッフが、高い崖の上から Yh の前に長いロープを垂らす。「Yh、引っ張ってごらん。登れるかな〜?」。すると、森中に響くような大泣き怒鳴り声が、パタッとやんだ。Yh は重かった腰をあげ、ロープの端をつかんだ。スタッフはその瞬間、ぐいぐいぐい〜と上に引っ張り上げる。そして、一気に緩めて、今度はどどどーっと崖の下まで滑り下とす。「ぎゃはは!! おもしろい! もっとやって〜」と Yh。「やだね〜♪」とスタッフ。そのまま持っていたロープを全部がけ下に投げる。すると、ムキになって「やってよ! やってよ!」と絡む Yh。Yh の近くにいた A に、「ロープをもって上ってきて、崖の上の木に結びつけてもらえる?」と指示すると、「うん!」と言って、A はロープの端をもち、バンビのようにかろやかに崖を登り、手際よく結ぶ。一部始終をみていた Yh は、言葉にはできないが、何か戦いごっことは全く違う、森の楽しみ方のヒントを見出したようだった。

それからの Yh は、人が変わったように、A とロープで崖を登り始めた。そのうち、ロープをやめ、A をまねするように、根っこを探しながら、自力で登る。スタッフの度肝をぬいたのは、途中でわざと手を離し、今度はがけ下の落ち葉のクッションへ真っ逆さまに! Yh は、体いっぱい森を感じ、自分で遊びをみるみる創造していった。大笑いしながら何度も何度も繰り返す Yh の楽しそうな声に、Kr と Kc もやってきた。Yh の創造的な遊びは、数十分もしないうちに、他の友だちに影響を与えるほどに。Yh の底力が芽をだした瞬間だ。

そういうヒントをもらい、更に創造的な遊びができるようになったのが、年長組だ。A に、Kc と Kr が加わって、みんなが綱引きするようにロープにぶらさがり、時計の振り子のように、崖を右から左、左から右へと垂直に動き回る遊びに発展した。崖は 6~7m の高さで傾斜も 40 度くらい。腕力のある年長 3 人組は、その力に物を言わせて、ぐーんぐーんぐーんと、大きな振り子になる。時々わざと手を離し、Yh のように落ち葉のクッションへ飛び込んでいく。

いつもはモジモジも多い Tk だが、あまりの歓声に、今日は恥ずかしさそっこのけで「僕も入れて!!」と輪に飛び込んできた。重力に逆らって体をコントロールしている時ほど、開放感を感じることはない。高い跳び箱を飛んでいる瞬間、棒高跳びでの跳躍、トランポリンの最高点、鉄棒でぐるぐる回っている時、海を自由に泳ぎ回る時…この快感は、その感覚を知ったものしか分からない。しかし、そのためには、一定以上の腕力や体力、バランス感覚、特に体幹が重要だ。Tk はこの 1 か月、吉野の森のロープに、Kc とともに誰よりも長くぶら下がり、幾度も長い竹の平均台を渡り、体幹を鍛えてきたのだ。今日、その積み重ねがまさに花開いたのだ。右へ左へ、上へ下へ、自分の思うままに、体を軽やかに、しなやかに使い、重力を遊ぶ。今こそ、自由に。もっともっと自由に。それは、大人の私たちにはもう真似できない、羨ましいほどのもの。

今回、Kr もすべてに積極的だった。「見てるから、いい」と言って参加しな

い、という場面は一切なかった。横たわった木にまたがって乗り、斜面登りにも取り組む。「この奥も方まで探検に行こう！」というスタッフの声かけにも、仲間とともに進む。

Kr は崖の上にあがり、みんなのはしゃぐ姿を、優しいまなざしで見つめていた。みんなが、大笑いしながら、イキイキと、仲良く、転んだりすべったりするのが、まるで幸福をかみしめているような、とても 6 歳とは思えない満足気な表情で。一歩さがって客観的にみれるようになったことは、今の Kr の心の表れなのかもしれない。いつも一緒にいないとつながっていないような、つかみどころのない不安や孤独の恐怖から解放され、真の仲間というか、いやむしろ、自分というものを、Kr 自身が肯定し受け入れ始めているのか。あの穏やかな様子に、最近の Kr の優しさの根っこが、垣間見えた気がした。

森へ向かう途中、気分が悪そうにしていた Y に気づき、スタッフが声をかける。本人の希望でバンガローへ 1 人もどり、しばらく休むことに。少し残念そうにしていたので、「夜たくさん遊べるように、今休んでおこうね」と声をかけると、かなり納得した様子(笑)。やはり、病み上がりの移動は堪えたのだろう。それから 1 時間半ほど横になった。しかし、そのうち体調も落ち着いてきたらしく、今度は休んでいるのに飽きてきた Y。呼び鈴用に渡した<鈴>を使って、スタッフをからかい始める。スタッフが鈴の音に気づき、夕食作りの手を止め Y のもとへ行くと、広い部屋のどこかに行方不明…(笑)。見つけた笑顔に元気もみえたので、スタッフも禁じ手の<魔法のアメちゃん>攻撃。その後、すっかり奇跡の復活。夕方まで遊ぶ崖チームに合流し、誰よりも最後まで、崖のロープにぶらさがり、ひっくりかえって、また落ちて…を繰り返した。

◎ みんなで焼こうよ♪ (晩御飯)

結局 4 時間も遊んだ。それも全身で、もうこれ以上ない！というくらいに。5 時すぎ。夕日が傾き、山が色づく。カラスが鳴くまで森で遊ぶなんて、なんだか昭和の子ども時代が懐かしい。さすがの年少組は、あくびもでた。おやつも忘れて遊びほうけたから、おなかもすいた。バンガローへの帰り道、たき火でソーセージをやくからと、細い棒をさがしながら帰る。拾った本数分のソーセージはあるのだろうか、とスタッフのつぶやきを耳にした Yk は、「みんなで食べるもの、枝の本数でなくソーセージの数をみんなで同じ数にわけて食べないと」、とスタッフを諭す場面も(笑)。

着替えをすませた子どもから、さっそくソーセージを焼きに、庭のたき火へ集まる。本当はお皿に添えるはずだったが、焼けたそばから It が食べた。すると Kz は、まだ焼けていないがさっそくかじりつき、Tk も Yt も Mi もそれに続いた。慎重な To は下茹でしてあることをスタッフに確認すると、さらに全体が加速し、全員がその場で全部食べてしまった。テラスに戻ってきたときには、だれの枝にもソーセージは残っていなかった。おなか、相当すいていたものね

…。(笑)。

夕飯は、持参したデシマルさんの炊きたて新米と、スタッフが長い時間をかけて煮込んで作ったカレー。今日は肉もたくさん入ってる！！夕日を見ながらみなで食べる。なんておいしいのだろう！風もなく、寒くもなく、熱くもなく、静かな山間で夕日を見ながらの夕食。すばらしい時間だった。途中、現地ボランティアスタッフのケンちゃんが、みんなの様子を見に来た。子どもたちが率先して、「一緒にたべて」「こちらにどうぞ」という声があがり、ケンちゃんをびっくりさせた。

「僕はね、実はお肉が大好きなんだ～ッ！」とカミングアウトして、肉をおかわりにきた To。まだまだ年中らしいかわいらしさが残る。

6時をすぎると、いよいよあたりは暗くなる。Kz が食べ終わるころには、すっかり日が落ち、真っ暗に。それでもスタッフが照らす懐中電灯の光を楽しみながら、今日もマイペースで完食する Kz であった。

◎ LET's バスタイム

今回、フィールドの次に大好評だったのが、お風呂だ。大きくて真っ白で、まるで船のようなバスタブは、ツルツルぴかぴか。一度湯船につかると、皆なかなか上がりたがらない。Na など、他二人がはしゃいでいるのをよそに、今日の疲れをとっているかのようなリラックスした様子。R は素潜りを始めた。Yt は、みんなでワイワイと入るのが照れくさいのか、緊張しているのか、正座して入る(笑)。シャワーを使って石鹸をうまく泡立て、体を隅々まであらう、Kr と Y。さすが年長。A は、「お城のお姫様が入るみたいなお風呂だね～」と Mi と興奮。じゃぼんっと湯船に飛び込んだ。Yh は「今日は一番がけのぼりが楽しかった！明日もしたい」といっていた。Yu は頭からお湯をジャンジャンかけて洗髪しても、全然大丈夫！と自信満々。To も、今日みつけた青いフシギな虫を思い出し、「あれ、やっぱりヤスデの仲間だろうね」と腕をくんで得意顔。Kz は It と一緒に、「電車楽しかったね～」と乗り物談義。

体を拭くときに、「おしり、プリッとして」というと、みんな素直にお尻を突き出してくれ、とてもかわいかった。

入浴後、ドライヤーを使って髪をかわかす際には、スタッフとセレブチックな美容室風やりとりがあった。子どもたちをお客さんとみたてたところ、とても喜んで列ができたのだ。年少の Na と Yt は、気持ち良すぎて、ウツラウツラし始めていた。

年長であるはずの Y も、白目になって、首がぐわんぐわんと前後に揺れている。何事にも余裕のある Kc は、キャーキャー言いながら喜んでいた。

Tk は、並んでいる時までは、みなと一緒にキャーキャー言っているのだが、いざ自分の番になると緊張するのか、「かゆいところはありませんか？」との問いに、とてもまじめな表情で、「ないッ。」と一言。そのギャップがとても愉快

だった。

一方、Mi は、本当の美容室のようにその時間をなりきり、心底楽しんでいた。想像遊び、これまた森の子どもの底力。

◎ 星空をみあげて

奇跡だ。さっきまで空一面に広がっていた薄雲が切れてきた。念願の星空ウォッチング。秋の星座の話には、子どもでも見つけやすいカシオペア座が登場する。おまけに今夜の月齢は、星空観察には絶好の日。スタッフの室内ゲームで目が冴えてきた子どもたちに、寝る前に少しだけ、星にまつわる話とカシオペアの特徴を伝え、バンガロー前の広い真っ暗な芝生の上に寝転がる。風もなくフリース一枚で寒くない。運よく、天の川も見える。さっそくカシオペアをスタッフがみつけて、懐中電灯で照らす。年少の子どもたちは眠気もでてきてぐずり始めたが、さすがの年長と年中は、しっかりとカシオペアを確認できた。

いつもは口数少ない Tk が、「カシオペア、あれでしょう？わかるよ、みえたよ僕！！」嬉しそうに話してくれた。R も「あれじゃない？」、To は「あっ！流れ星！」。じっくり観察に入り込む Kc と Kr。暗くなった外や夜空をみて「帰りたい」と言ったり、泣き出したりする子は一人もいなかった。

事後の話だが、この日の星座の話に興味をもってくれた Kr は、帰宅後プラネタリウムにでかけ、しっかり説明を聞いてきたようで、後日、詳しいことを教えてくれた。

残念ながら、その後雲行きも変わり、子どもたちの体力もいよいよ限界に近づいてきたので、10 分の短い観察を切りよく終え、いよいよ就寝の準備に入る。

◎ 芋虫ゴロゴロ～寝袋で寝ようよ♪

就寝前の歯磨きでは、いつもの習慣なのだろう。みんなが口をあけて、仕上げ磨きして～っと言ってきた。嫌がる子は一人もいなかった。

慣れない寝袋に体をうずめて、みんなで広間に芋虫のようにゴロゴロ横たわる。マットも全面にひかれていて、寝心地は上々だ。スタッフの夜のお話の前に、「まだまだみんな、眠らないでね～」と、眠気を誘う決め台詞。それから 1 分もたたないうちに、Yt と Ir は撃沈。エンドレスの話を聞きながら、一人、また一人と夢の中へ。

この日は、意外と夜の気温が高く、天窓を開けて眠るほどだった。そのため、寝袋から脱出する子どもが続出し、着替えをさせたり、寝袋に入れなおしたりと、就寝後もバタバタのスタッフだったが、夜中 1 時のトイレを数人済ませた後、ようやくやまねこバンガローに、静かな夜が訪れた。

就寝が一番の心配事だった Ta は、スタッフの話に耳を傾けながら、頼りの大好きタオルなしで眠りにつけた。Ra も同じように、愛着タオルを手にするこ

なく、スタッフの背中トントンですんなり眠ることができた。

◎二日目の朝の様子

R と Kc は、6 時前に目覚め、朝からテンション高くおしゃべりに花が咲く。「みんなが起きちゃうから、もう少し静かにつ！」と何度いっても、早く活動がしたくてたまらない様子。そのうち、寝起きのよい Kz が仲間に加わり、互いの寝袋を行き来したり、パンツを突然ぬいで放りなげたりして、朝からゲラゲラゲラゲラゲラ！

Ra は、寝袋の中から窓の外を見あげて、ぼーっとしながらも「あ！お空が見える！」。徐々に明るい空に変化したことに気づいた様子。ステキ！

To、Ir も順に目覚め、起きた順にトイレに行った。Ir は、トイレで自分のオムツ姿に気づき、誰の仕業か何しろその状況が不満だったようで、「何、これ?!」と同伴したスタッフに逆上クレーム(笑)。スタッフが「朝気づいたら、なんと私もオムツだったのよ！なんだろねえ、フシギなこともあるよね～。やまねこの仕業かなあ?!」と、笑いをこらえて返した。

Ta は、ケロっと起きてきたわりに、少々不安げ。「昨日はタオルなしで眠れたねえ、すごい！」とみんなに言われると、ぎゅっと心の中に不安をしまった。

Yk は、「一人で寝れたよ！」と大喜び。「すごかったね！」とほめると更に喜び、Ta の奮闘ぶりにも賞賛を送っていた。

おもしろも大泣きもおらず、お泊りの心配事は、すべて杞憂に終わった。オムツをはずして挑戦した子も、大成功！次への自信につながったようだ。

それから 1 時間かかったのだが、みんなで助け合いながら、寝袋の片づけや荷造り、朝食の準備をした。寝袋を片づけには苦勞している子が多い中、Na はダントツのスピードで、器用にさささと片づけて、周囲の子どもたちから一目置かれる存在となっていた。

朝ごはんは、暖かい和風お出汁のにゅうめん。食べやすいようで、咳の多かった Mi や Ra をはじめ、どの子も食が進む。給食ではあまりお目見えしない、フルーツヨーグルトが大好評で、おかわりが続出した。風邪気味の子どもたちも、薬の力を借りたりしながら、しっかり食べ、しっかり眠ったおかげで、朝から全員、今日も元気いっぱいだ。

◎ 精舎の森にて、誕生日セレモニー

前日に引き続き、精舎の森をそれぞれに満喫した子どもたち。「さあ！そろそろ戻らないと…」そう声をかけると、「ええ！もう?」「早い～!」とちよっぴりブーイング。そんな年長にロープの片付けをと思っていたが、その声かけをする前にスタッフは電話対応に取られる。

その電話を切り、(さて、指示を)と、子どもたちに声をかけると「もう外し

たよ！」と年長。短時間でものの見事にロープを外したことに、スタッフ驚き。「すごかったのよ～！年長さん。R は丸太に登って、ささっとね…！」見事！！！！！！

森を出る間際、Ta の誕生祝いをする事になった。「今日の主役は、Ta ちゃ～ん！」とみんな。「いくつになるの？」の質問に「4 歳！」と指も 4 本立てて示す。愛着タオルなしでお泊まりの夜を乗り切った Ta。ろうそくの灯を吹き消すと、Ta の 3 歳は 4 歳に、一つ大きくなる。キャンプの夜を過ごし切った誕生日は心をグッと大きくさせたに違いない。

◎ 帰路

早いもので、あっという間にすべてのプログラムが終了した。最後のおやつに用意されていたのは、コアラパン。年少組は、はじめてのコアラパンにテンションが上がりっぱなし。Mi は「コアラが笑ってる～」。Na「これは、困った顔！」。「おもしろいねえ」と Kz。「ほんとだねえ」と Yt。みな仲良く楽しそう。誕生日だった Ta に、「これもプレゼント★」といって、コアラパンを渡すと、微妙な笑顔に(苦笑)。「それはかわいそう！」と Yk が笑いながらいくと、みんなも笑った。あまった分を取り合うことなく、まだ食べていないスタッフの分にと、周囲を気遣う場面も。本当にいい子たち！！

体力に余裕のある年長と年中組は、まだまだ遊び足りないらしく、To「まだいたいね～」、It も「また来ようね」。「あと一万回泊まりたい」と Kc。「あと 100 万回とまりたい」と R。年少組より先に駅に到着し、最後のおやつをゆっくり楽しんだ。

復路は途中乗車になる、木場茶屋駅。すでに列車にはお客さんがいっぱい。やむなく年長中心に手すりにつかまり一駅耐える。

「串木野～、串木野～」の車内アナウンス。停車すると幸運なことに、沢山の乗客が降り、丸々一列空いたのだ！その席に Ta、Na、A。A の膝に Kz。後ろの片側座席に R。窮屈だけれど、何とか座席確保！その様子を見ていた隣の乗客が「どうぞ、座って」と声をかけてくださった。50 代くらいの女性のお客さまだった。「ありがとうございます！」空いた席に Kz が移動。その女性は、微笑みながら「かわいいわね～」とささやく。「今日は子どもたちとキャンプに出かけて」とスタッフ。「いくつ？」一人一人の学年を紹介。「列車はじめてだったの！」と、話しかける A。

途中、国道脇を通る線路横で、車スタッフが子どもたちの乗った列車通過時に手を振ろうと分刻みの計画でスタンバイ。最後の感動サプライズ、と気合を入れ、意外とスピードに乗っている曇りガラスに向かって手をふる。

しかし、車窓では案外、感動が薄かったようだ。それもそのはず…しばらく話しをしていると、Kz がリュックをギュッと抱えたまま眠りだした。

「Na ちゃん寝ちゃった」と Ta。Yt は白目をむいて、列車が動き出した途端

に（笑）…ホッとしたのだろう。続いて、R も眠りだす。途中で目覚め「えへっ、寝ちゃった」と照れ笑い。「寝ていていいよ。起こすから」というと、安心して再び眠りへ…。

席を譲って下さった女性は途中で降りるのではなく、わたしたちと同じ終点の中央駅まで乗車していた。進むにつれて混み合う車内。ずっと立っていて下さった。降りる前、もう一度子どもたちとともにお礼を言った。

人の優しさがじんわりと心にしみた、帰りの列車。子どもたちがこれから歩む道、今日の方のような、たくさんの人の優しさに触れられますように。そして、そんな優しさを持った大人になれますように…。そんなことを心ひそかに願いながら、ママたちの待つ改札口を目指した。

朝から体調を崩してしまった、Yh。あんなに遊びたかったけれど、みんなから離脱してやまねこバンガローでお迎えを待つ。気分は悪そうだったけれど、口調はしっかりしていて、昨日の森での話が止まらない。崖のぼりをしたこと、最後にはロープをつかわないで登れたことがとてもうれしかったようで、横になりながらもうれしそうだった。ご家族のお迎えがくるとホッとした様子で、Yh も無事、自宅の車で帰路についた。

さて、1 日ぶりの感動の再会は、みなさまご記憶の通り。親にとってはハラハラドキドキの一晩だったかもしれないが、子どもたちは、友だちの力を借りながら、すんなりとそのハードルを軽々と越えていってしまったように思う。

この二日間の記憶が、一人一人の心にどんな形で残っていくのだろうか。彼らが大きくなった時、「あなた、こんなだったのよ」という話を一緒にしたくて、毎回このレポートをしたためている。そして書きながら、再びあの時の感動をかみしめさせてもらっている。

どんな星よりも

一人一人、みんなキラキラ。

沢山の感動をありがとう！